過ぎゆく時の中で

島尾敏雄

過ぎゆく時の中で

島尾敏雄

新潮社

過ぎゆく時の中で

著者　島尾敏雄

昭和五十八年　二月二十五日印刷
昭和五十八年　三月　五日発行

発行者　佐藤亮一

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地
株式会社　新潮社

電話　業務〇三(266)五一一一　編集〇三(266)五四一一

定価　一二〇〇円　振替　東京四―八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷所・東洋印刷株式会社　製本所・大口製本株式会社

© Toshio Shimao, Printed in Japan. 1983

ISBN 4-10-310104-0　C0095

【過ぎゆく時の中で】目次

I

ヨシユキ反応——吉行淳之介「夕暮まで」をめぐって　13
飯沢さんの約束　20
同窓仲間　23
小島清さんの存在　26
吉本隆明事始　29
太宰治とは誰か　32
私の文学論　34
夢について　48
夢と私　64
本の果て　74

II

下地島の通り池　79
私にとっての奄美　82

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

日本の南の島々　85
南島について　89
沖縄の歌謡選釈　104

Ⅲ

写真の中のマサコちゃん　111
幼稚園の記念写真　113
幼時の記録　115
横浜生まれ　117
五十年目の昭五会会報　120
たとえば下宿の跡　122
唐八景と南山手町——青春紀行　124
「こをろ」と私　128
「こをろ」復刻の事　131
「こをろ」再生　133
元代回鶻人の研究一節——私の卒業論文　136

「出発は遂に訪れず」ほか——戦争と私・作品の背景
震洋の横穴 140
敗戦直後の神戸の町なかで 144
「近代文学」のかかわり 149
私の読書術 152

Ⅳ

原作者からの思い 157
原作者から 157
あざやかな変容 158
劇団旅行の驥尾に付して 158
半故郷 159
夢見と行歩 162
夜行連絡船 167
開聞岳 168
南島の漂い 169

谷川健一氏への返書　170
名瀬よ、再び　171
黄昏の砂漠　174
海辺遊歩道のある町　176
祝賀会での謝辞　178
江角先生に思いを馳せて　180

V

井上岩夫の中のムラ　185
『種村季弘のラビリントス』推薦文　189
『南島歌謡大成』書評　190
阿井景子『龍馬の妻』推薦文　191
瀬戸内晴美『比叡』推薦文　192
夢の綴り　194
北海道の目　195
三枝和子『月の飛ぶ村』推薦文

仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』推薦文 196
『震洋特別攻撃隊』に寄せて 196
日野先生『東洋史学論集』刊行に寄せて 200
東峰夫『大きな鳩の影』推薦文 201
小川学夫『奄美の島唄』推薦文 201
『日記抄』あとがき 202
『島尾敏雄による島尾敏雄』後書 205
わがポーランド語体験から 206
島尾敏雄・吉田満『特攻体験と戦後』解説 211
『古代・中世奄美史料』推薦文 215
『大菩薩峠』の醍醐味 216
基八重『島住み』讃 218
夏目漠さんの突出とやさしさ 220
歌の出会い 222
和秀雄『ニホンザル・性の心理』推薦文 226
岩谷征捷『島尾敏雄論』推薦文 227
窪田洋子『島に立つ』推薦文 228

鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』の刊行によせて 230
『沖縄大百科事典』推薦文 231

VI

南日本新聞新春文芸・短編小説選評 235
文藝賞 選評 242
新沖縄文学賞 選評 249
群像新人文学賞 選評 256

あとがき 260

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

過ぎゆく時の中で

I

ヨシユキ反応

——吉行淳之介「夕暮まで」をめぐって

「夕暮まで」の読後感を書くことを引き受けたのはつと心の動くものがあったからだ。私は長いあいだ地方暮らしをしていたせいもあってか同業者との交際はいささか少ないほうに属するのではないかと思っている。そのこととかかわるかどうかはわからないが、その少ない仲間の作品もあまり読まずに過ごしてきた。むしろ読まないほうが敬愛の心が持続できるなどと思いこんでいたからかもしれない。但しその著書は書棚にまとめて並べ置き、背表紙をさすっている具合ではあるけれど、実は吉行淳之介氏も数少ない私の同業仲間の一人であるが、彼の作品の中で私が読んだものはそれ程多くはないことを告白しなければならない。いやそう言ってしまってはどこかがちがってくるので、言い直してみると、彼の初期の作品は私は心して読んでいた。たとえば敗戦直後から昭和二十三、四年あたりまで、年譜を見ると彼が二十二歳から四、五歳の頃にあたるその時分に、彼のかかわっていた同人雑誌の「葦」や「世代」や「新思潮」を、神戸に住んでいた私はせっせと買い求めて、その中の彼の小説を期待の心を寄せつつ読んでいた。あの当時はそのような同人雑誌も案外に全国に出廻っていて、その気で注意をしていれば容易に入手ができた。その頃私はリストを作り新しく登場する小説家の名前を年毎に列記して記憶にとどめる手す

さびを覚えていたが、吉行淳之介の名前は比較的早い時期に書きこんでマークしていたのは、その印象が殊更に強かったからであった。それは彼の作品からの感受に柔軟なもののあったことによるのは言うまでもないが、もしかしたら彼は吉行エイスケ氏の子ではないのかという思い入れがあったことにも原因する。吉行エイスケが新興芸術派と呼ばれるふしぎな文学流派に属する作家であることは戦前から知ってはいた。だが実際にその作品のいくつかを読んだのは戦後になってからで（そして既に彼は死亡していたが）、そこにかさなるようにして吉行淳之介なる名前が登場してきたのであった。当初に読んだ吉行淳之介の短編小説は（それらの題名も内容ももう記憶にとどめてはいないが）、甚だ吉行エイスケのそれに似ていると思ったのはどういうわけだったろう。戦後になってはじめて読んだエイスケのほうの短編小説も、題名も内容も忘れているが、読後に受けた或る印象は、ハイカラな硬質の単語が自在に使用されていたようだという具合に、なお私の感受に痕跡をとどめている。そもそも最初に子の吉行淳之介の作品を読んだ時に感じたのは、その父吉行エイスケの小説によく似ているという事情であった。一度、エイスケを読んだあとでそれほどの間を置かずに淳之介を読んだことがあった。するとその二つの短編小説がなぜかあと先がつながっているという感じを受けたのだ。父の小説の筋が終わったところから、子の小説の筋が展開をはじめているように受け取れた。そしてそれが実にうまく結びついていると思ったのだ。もっとも父のほうの文体が無機的であるのにくらべると子のほうのそれにはずっと有機的で柔軟な豊かさが感じられた。私は吉行淳之介がその父の小説の文体をもじって展開させ、父の素質を受け継ぎつつ復活させようとはかっているにちがいあるまいと思い、甚だ好意のまざった興味を覚えたのだった（しかしあとになって吉行淳之介から直接に聞いたところによると、彼はその父の小説集は一冊も持っておらず、又読んだことも無いということであった。とすると私はあの時何をどう読んだのだろう。或いは淳之介の短編を二つ読みながら、うっかり先に読ん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com